

連載 オブジェクト指向と哲学 第 57 回 ピュタゴラスの音楽(3)

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

プラトンに継承されたピュタゴラスの「天球の音楽」の概念は、ローマ時代になってキケロ (B.C.106-43) の「スキピオの夢」として復活します。

●スキピオの夢

--

ピュタゴラスはキケロの作品の多くに登場する。(省略) キケロの言葉が最もピュタゴラス派らしく (そしてプラトンのようにも) 聞こえるのは、彼の「スキピオの夢」のなかだ。「スキピオの夢」はキケロの『国家について』の最後にあり、キケロはプラトンの『国家』の最後に揚げられた「エルの物語」を手本とし、見事な対比を形作っている。キケロの「夢」は、音楽や学習、才能、神聖な学問への傾倒を通して存在の至高の次元と永遠に再合一できた人たちのみ近づくことのできる領域へと、彼を導く。[1]

--

「スキピオの夢」は小スキピオ (B.C.185-129) が、夢に現れた祖父大スキピオ (B.C.236-183) から壮大な宇宙論と人生訓の話を書くという形で、プラトンが「国家」のなかで自身の思想をソクラテスの対話として語った内容に影響を受け、キケロが小スキピオの夢の中での対話として再構築した。

『天界の描写や魂の不死などが説かれていて、もっとも荘厳なものといわれている。要するに、国家のため骨折った政治家の報酬や価値について議論され、けっきょく彼らは死後も報いを受けるという考えがもとになっている。』[2] 編者解説

--

「おや？これは何の音ですか。私の耳いっぱい聞こえている、これほど大きな、しかも、これほど美しい音は？」

祖父は答えました。「これこそ、あの古来名高い音であるぞ。これを内部から割り分けているいくつもの隔ての間は、等しくないとはいえ、一定の比に従うきまり正しい差異を持つ。この音の主は星々の輪、これらが押し寄りつつ動いていくことによって、この音は作り出され、かくして、高い音が低い音といろいろに混ぜ調えられて、ここにおのずと作り出されてくるのが、その音色

はさまざまであっても、たがいに劣らず、みな、和音なのである。」[2]

--

大スキピオが語る天体の軌道は、地球を中心に恒星が貼り付いている天球との間に、内側から月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星の 7 つが別で、天球の動きとは独立の動きをしながら回っている。この配列は当連載第 55 回図 3 の惑星音階です。図 1 に一部分再掲します。



図 1 惑星音階[3] [http://www.jr-tower.com/t38_music からコピー]

--

まことに、これほどの動きが、いくつも勢い激しくうち進められていながら、音ひとつたためようなことなど、あろうはずはなく、また、ことわりの定めによって、おのずから、端の音の一方が高ければ、他方は、低いものになってくる。

こういうしだいで、恒星を載せていく、上の極にあるあの天球の道は、他の道にくらべて、回り方が急激であるために、高くて勢いの激しい音をたてて動いていき、逆に、最も低い音は、月の進んでいく最下の道がたてている音である。[2]

--

●振動

ピュタゴラスは天球の音楽をどうやって聞いたのでしょうか。空気の振動として鼓膜で捉えたとは考えられません。

地球の周りを高速で回転している諸天体は音をたてている筈だ、と考えたのは言い換えれば振動しているということです。人の耳に感じ取れる空気の振動はたかだか 20Hz~20kHz です。これより低い乗り物や地震の振動は体で感じます。音とはいいません。大音響のスピーカーの重低音は耳と同時に体でも感じます。

可聴域より高い周波数の電波は空中を飛び交っていますが、人には感じません。テレビや携帯はそれを捉えて人の視聴覚に変換します。電波も振動ですが空気の振動ではありません。

物質を媒介として体に伝わる振動、空気を媒介して耳に伝わる振動、電子機器を媒介して視聴覚に変換される電波という振動、もっと周波数の高い光の色の違いも振動数の違いです。

--

ところが、さきほどから申している響きは、まことに強大。これは、全宇宙の急激きわまる回りによる轟きであるため、人間どもの耳では、とうてい、聞くこともできぬほど。それはちょうど、太陽をまともに見つめる能力を、おまえらは持たず、その放つ光に、おまえらの瞳の、さだかに認め分けようとする力が、凌ぎ挫かれるありさまに似ている。[2]

--

●ジェットストリーム

--

遠い地平線が消えて、ふかぶかとした夜の闇に心を休める時、
はるか雲海の上を音もなく流れ去る気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています。

...

きらめく星座の物語も聞こえてくる夜の静寂の、何と饒舌なことでしょうか。

...

--

FM 東京の深夜放送のはじまりの詩、この「夜の静寂の、何と饒舌」こそ昼間の雑踏では聞こえないピュタゴラスの音楽です。

以下次回...

参考書籍

- [1]キティー・ファーガソン、[訳]柴田裕之、ピュタゴラスの音楽、2011、白水社
- [2]世界の名著 14 (キケロ エピクトレス マルクス・アウレリウス)、1980、中央公論社
- [3]ジョスリン・ゴドウィン、[訳]斉藤栄一、星界の音楽、1990、工作舎
- [4]左近司祥子、謎の哲学者ピュタゴラス、2003、講談社選書メチエ
- [5]B.チェントローネ、ピュタゴラス派、2000、岩波書店